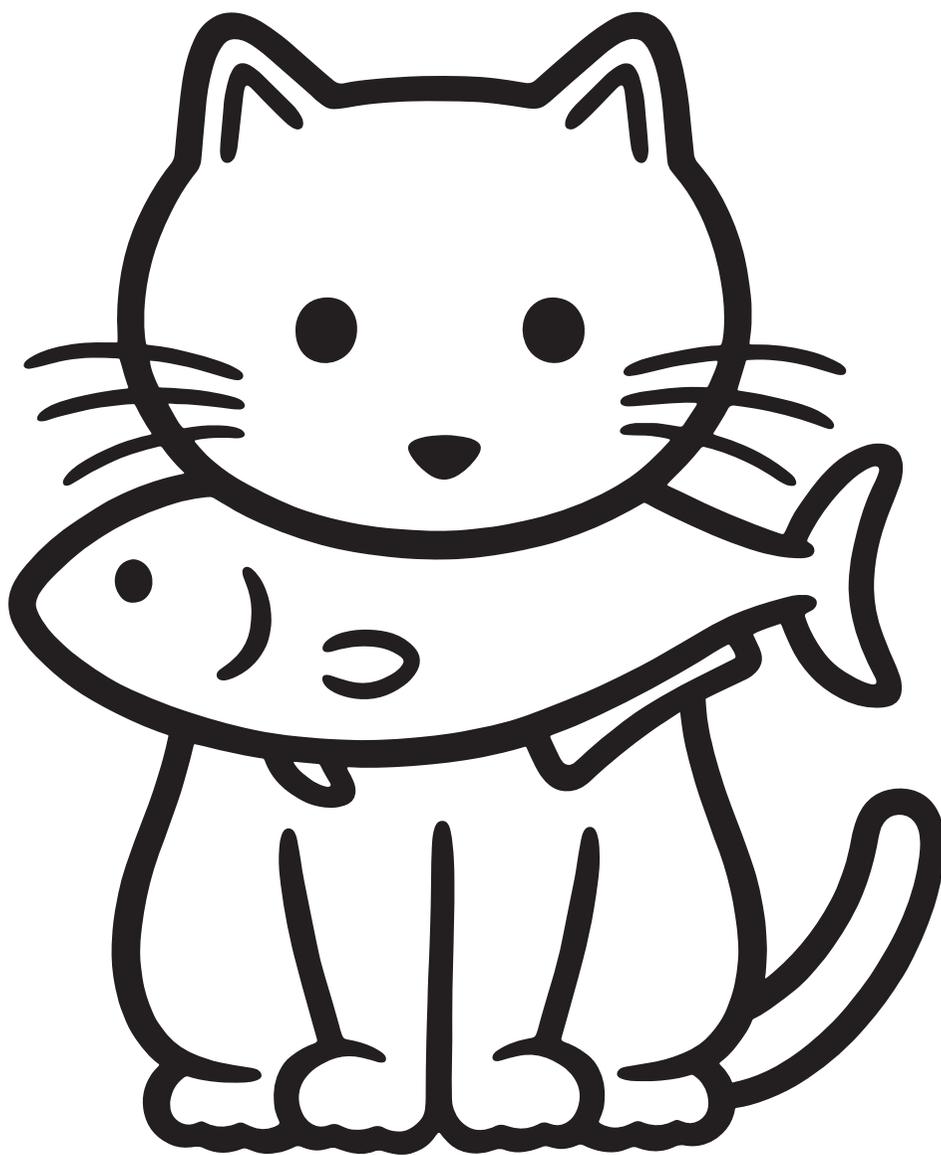


MIURA

Southernmost of Miura Peninsula.
Starting a new life here in this town.

三浦半島最南端
この町で、生きてゆく



三浦市



今、誰もが
暮らしかたや働きかたを見つめ直す
転換点に立っているのかもしれない

もし、あなたが
「なにかを変えたいな」と思っているなら
三浦に遊びにきませんか？
近所に散歩に行くような、軽い気持ちでいいんです

たくましく生きる三浦の人々
畑の向こう側に広がる、海と夕日の美しさ
「生きてる」ことをお祝いしたくなるような
不思議な町なんです

最近では三浦に引き寄せられた人たちが
新しいことをはじめようとしています
小さなうねりが、大きなうねりになって
楽しいことが起こりそうな予感に満ちています

そんなこの町の今を、私たちに一冊にまとめました
あなたがこの町のドアを叩く日を楽しみにしています

「なにかを変えたい」と願うあなたへ



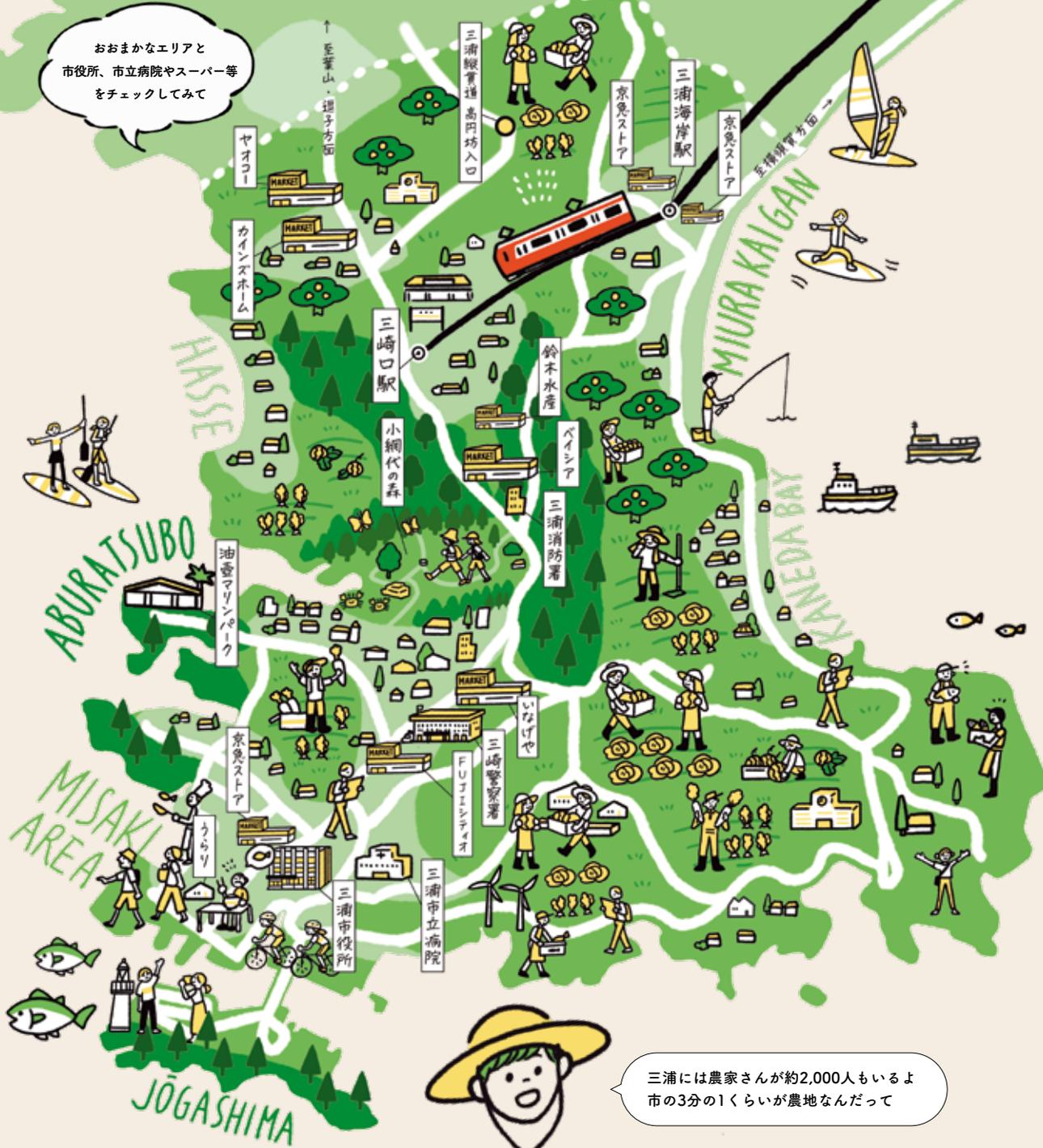
どこにある？ 東京からどういく？ なにがある？

三浦市のことがざっくり分かるMAP

三浦半島の最南端に位置する三浦市、マグロの水揚げで有名な三崎港、海水浴客で賑わう三浦海岸。
仕事と暮らしがベストマッチする三浦の特徴をかいつまんでご紹介します



三方海に囲まれた三浦半島の最南端人口は41,807人（2020年9月時点）で隣市は横須賀市。相模湾、東京湾に面し、最南端には城ヶ島がある。市域の約半分は畑や山林で、小網代の森など自然豊かな場所が多い。漁業と農業が盛んで、マグロをはじめとした魚介類、三浦大根やキャベツ、スイカなども名産品。京急電鉄の駅は「三浦海岸」と「三崎口」のふたつ。



おおまかなエリアと市役所、市立病院やスーパー等をチェックしてみよう

三浦には農家さんが約2,000人もいるよ市の3分の1くらいが農地なんだって

マグロで有名な観光地「三崎港」があって年間観光客が約600万人も訪れるのよ〜

コンビニやドラッグストア、個人病院もたくさんあるから不便を感じないにゃ

買物に困らない中大型スーパー多数
三浦市内各所の中・大型スーパーが存在し、買い物には困らない。三浦市のちょうど真ん中あたりに大型スーパー「ベイシア」と市民交流センターが一緒になった施設が。市役所と市立病院は三崎エリアに立地。MAPの薄い緑部分に住宅が密集しており、三浦海岸駅前、三崎エリアにはいくつかの商店街がある。

東京にも出やすいの！



夏は涼しく、冬はあたたかい
東京に比べて夏は比較的涼しく、冬でも温暖な気候の三浦市。冬場、横浜や東京で雪が降っていても三浦で降らないこともしばしば。三浦市は平地が少なく、坂が多いので歩いて移動するには少し不便さを感じるかも。電動自転車や原付、車があれば自然豊かな場所や買い物にも気軽に行ける。電車は始発なので必ず座れるのもポイント高い！

〈電車でくるなら〉
品川駅から三崎口駅まで約65分
横浜駅から三崎口駅まで約50分
三浦に行くときは「快特」に乗ると一番早い。YRP野比駅を過ぎたところから海が見える



〈車でくるなら〉
東京ICから三崎口駅まで約75分
横浜横須賀道路「衣笠IC」から三浦縦貫道路を通過して高円坊入口で降りる。そこから下道で約10分



〈バスでくるなら〉
三崎口駅から三崎港まで約15分
京急バスの「三崎港」「通り矢」「城ヶ島」行きに乗り「三崎港」で下車。片道の運賃は310円「三崎東岡」行きの終点からだ徒歩約5分



〈レンタサイクルでくるなら〉
三崎口駅から三崎港まで約25分
三崎口駅改札を出て右の観光案内所や三浦海岸駅前「三浦観光バス」などで1日1,600円で借りられる





三浦との出会いは突然に

短い髪をたなびかせ、商店街を自転車走り抜けていく。移住者の古矢美歌さんだ。みんなからは「みかりん」と呼ばれている。

地元の店々で娘のように可愛がられている姿。農家さんにももらったであろう立派な野菜を小脇に抱えている姿。人懐っこい彼女がこの町にきてから、三崎の気温がちよっと上がったようだった。古矢さんが初めて三浦三崎を訪れたのは2020年6月のこと。当時、東京の世田谷でひとり暮らしをしていた。

「ある朝、ふいに『今日は会社を休んで、将来住む町を探しに出かけてみよう』って思ったんです。ほんの思いつきでした」

いつかは、東京に近い田舎で暮らしたいと思っていたという古矢さん。数時間後には東海道線に揺られ「真鶴駅」を目指していた。「電車の中でツイッターを眺めていたら、三崎で出版社を営む方の方がやってるお店がかっこいいなど、惹かれたんですね。そ



の時まで、三崎という町のことをまったく知らなかったんです」

気づいたらスマホで真鶴と三崎の距離を調べていた。「今日、見学に行ってもいいですか?」と投稿者にメッセージを送り、真鶴を小一時間見て回ったあと、足早に三崎に向かった。この偶然の出会いが、人生を変えろと思ってもせず。

移住を決め、仕事も辞めた

「三崎での時間が楽しすぎて、その日は終電で家に帰りました」

三崎の町がすうっと肌になじみ、その後縁あって三崎の滞在型シェアオフィスのメンバーとなった古矢さん。2週間に1度のペースで三崎を訪れるようになり、持ち前の人柄でどんどん知り合いを増やしていった。そうした日々の中で、「このまま東京で暮らすのも、今の仕事を続けるのも、なにか違う」と思うようになった。その違和感は膨らみ、秋が終わる頃に弾けた。

「移住すると伝えたら、三崎の仲間たちが家賃3万円の戸建てを用意してくれました」



三崎下町エリアにある4Kの戸建て

1. 家賃3万円の戸建て。「まさかのぼっとん便所なんですけど、まあ慣れました(笑)」
- 2,3. 「食」を愛する古矢さんらしい本や食器。キッチンも綺麗に整頓されていて、上手に空間をつかっている。「このお茶コレクションが小さな自慢です」と微笑む
4. 日当たりのいい2階の寝室には植物とアロマディフューザーが
5. 平日はさまざまな企業の編集やライター仕事をこなす。「飲食店を開業して、しばらくは収入も不安定だと覚悟していますが、こういうパソコン一つで請け負える仕事があるのは助かりますね」
6. 工芸品など、小さくて可愛いものを収集するのが得意

手応えのない日々を超えて

古矢さんは大阪出身。高校生の頃から漠然と「都会に近い田舎で飲食店をやる」という夢を抱いていた。しかし三崎に移住する前は、その夢に向かって前進している手応えを持てずにいたそうだ。

「上京して、憧れのフードコーディネーター事務所に勤めたのですが、ハードで続けることができません。その後は、飲食系の人材紹介会社、IT企業、食と暮らしのウェブメディアの編集ライターなど、職を転々として。本当に『食』の仕事がしたいのか、もっとじっくりくる何かがあるんじゃないかと、とにかく自分探し状態でした」

しかし、東京の家賃は高く、貯金は一向に増えない。自分のキャリアが「積み上がっている」という実感を持てずにいた。

同世代の活躍を見て落ち込んだり、やりたいことがある人を羨んだりしたという。「自分で何かを成し遂げたいと思いつつも、自分が前に出ることが怖かったのかもしれない。今思うと、当時の私はいつかびつたりの生き



わさびおろしは
一度体験すると癖になる!

尊敬する
大将と女将さん

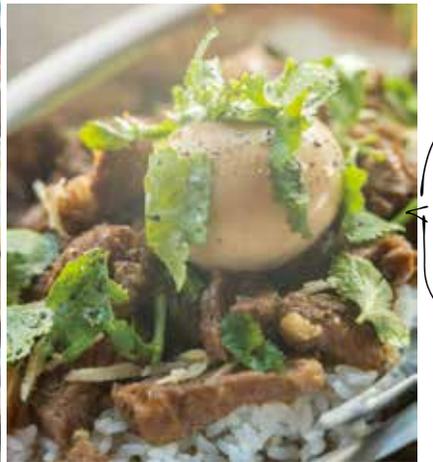


古矢さんが見つけた
三浦のたからもの
美味いもの
ステキなひと
ひみつの場所
住むことで見えてきた三浦
の魅力を「食」「人」「場」
の3つの切り口で語ります。



食房miuraの「アジフライ」

初めて食べて感動したというアジフライ。ふわっと柔らかい肉厚な身に、大根おろしとわさびをたっぷりつけて食べるのがmiura流。「爽やかで、揚げものだけど重たくないんです。他にいろいろ頼んでいても、ひとり一枚食べられる。いや、むしろひとり一枚食べたいくらい」。素材が活かされた料理はどれもすばらしく、名物のトマトサラダや豚タンもおすすめ。日本酒がワンカップで提供されるのも楽しい



「売り切れ必至の
特製魯肉飯」

間借り食堂「かえる」

三崎の商店街にあるカフェを土日だけ間借りして「かえる」を営む。魯肉飯やガパオライス、カレーなどアジアメニューを提供し、大好評を得た。2021年開店予定の飲食店は、三浦の野菜や魚をふんだんに使った定食屋を構想中。この冊子の読者が三浦三崎を訪れたときには、もしかしたら開店してるかも？ 訪れた際はみかりんに話しかけて、三浦三崎の魅力を直接聞いてみて

港町での生活を感じる「北条湾」

「たまに朝の散歩をするんですが、晴れている日の北条湾は水面が光って本当にきれい。自転車で買い物に行くときに寄ったり、おでかけついでに通ったりします。湾の近くには、小さな干物屋や喫茶店がちらほら。三崎港からの散歩コースにいい。小さな船が多く停まっていて、港町の生活感を感じられる



初めて仲良くなった地元人「やすさん」

三崎に通いはじめた頃に行っているというまぐろ丼専門店・かね廣。観光地特有の押し売り感がない、ひっそりとした佇まいに“知る人ぞ知る店かも”と入ってみたのがきっかけだったそう。「やすさんは初対面の私に、三崎での飲食店経営や土地のことを教えてくれて、引越しのときもいろいろ気にかけてくれて、本当の叔父さんのような存在です(笑)」。生粋の三崎人であり、まぐろの仲買人でもあるやすさんのまぐろ丼は必食だ

方が見つかると思えば、やっぱり考えていたのだと思います」
何者かになりたいという焦りと、自分は誰にも興味を持たれない人間だという自己否定の感情。「コロナ禍が、改めて自分を見つめ直すきっかけになりました。やっぱり都会に近い田舎で店をやりたいに行き着いたんです」
人生の手綱を握るのは「私」
三崎で出会う人に夢を語ると返ってくるのは「いいじゃん！ やってみなよ」「どうすれば実現できるか考えよう」と背中を押す言葉だった。その前向きさ、おおらかさによって、自分の中で凝り固まっていた何かが溶けていったという。
「振り返ってみれば、私はやりがいのもてる仕事や、自分が突き抜けるきっかけを探すばかりで、自分に何ができるかという視点がなかったんです」
必要だったのは「自分の望む暮らしや仕事を自ら作っていく。自分の手で人生を面白くしていく」という覚悟だったと気づかされた。



みかりんの挑戦はまだ始まったばかり。どこに行き着くのかは誰にも分からない。ただ、確かなことがある。それは、彼女がこれまでで一番、自分の足で立っていることだ。
た。それは他人から見ればちょっとした気づきかもしれない。しかし、古矢さんにとっては生き方の大転換だ。
移住してまだ半年足らず。それでも、自分を支えてくれる人たちの出会いによって、古矢さんは大きな一歩を踏み出している。まずはカフェに間借りして、週末だけの食堂「かえる」を試行。そして今、仲間たちの援助も受けながら、念願の飲食店開業に向けて準備を始めている。
「以前の私はどこに繋がっているのか分からないトンネルの中を歩いているような気持ちでした。もちろん、今だって不安はありますよ。でも、それ以上にわくわくしています」



シャッター通りで
「写真を撮る機会が増えましたね」と彼女は言った。
「夕焼けとか、ひなたぼっこしている猫とか。何気ないものばかりなんですけど、目に入ったものを愛おしいと感じる瞬間が増えたっていうか」
移住をきっかけにインスタグラムを始めた。
「見てくれた方が『三崎って素敵だな』って思ってくれるといいなあって」
「友達を案内したいですね。今はなかなか難しいですけど」と彼は言った。
「MP（ミサキプレッソ）」とか『割烹松風』とか。友達を連れていきたい店がたくさんあるんですよね」

でも、店の選択肢なら東京にいた頃の方がたくさんあったんじゃないですか？ と少し意地悪な質問をしたら「本当だ。でも東京にいた頃はそんなこと思わなかったんです。どうしてだろうね？」と横にいる彼女にうれしそうに笑いかけた。「どうしてなん

だろうね？」と彼女も笑っていた。三崎以前、ふたりは東京で一緒に暮らしていた。代々木上原。渋谷区の真ん中にある閑静な住宅街。毎晩のように友達と会い、外食していた。そんな生活が続いていくことに何の不满も疑問もなかった。2020年4月、新型コロナウイルスの感染拡大により自粛生活が始まるまでは。
「3月の後半から、僕も彼女もリモートワークになって家にいることが多くなったんです。自粛明けもこれが日常になるというので、だったら違う環境で仕事したいなって思い始めたタイミングで三崎にある『TEHAKU』のことを知ったんです」
2020年6月にオープンした『泊まれる仕事場TEHAKU』のメンバーになった彼は、月の3分の1を三崎で過ごすようになった。人も景色も港町の空気も何もかもが気に入った。夏が過ぎ、秋が来て、冬を迎える前に決断しなければならなかったのが、

二人で住んでいる東京のマンションの更新だった。
「二回目の更新だったし、家賃高いよねって感覚もあったし、つきあって五年半だったし、いろいろどうしようかって感じて。ね？」と彼女がしあわせそうに微笑んだ。
ふたりが家族になる場所へ
結婚指輪と一緒に引っ越し先を探し始めた。
「最初は東京の端に住もうかって。中央線の吉祥寺とか三鷹とか」
「でも、端ならもはや東京じゃないかもいいんじゃないかって真鶴を見に行ったり、熱海とか相模湖でもいいんじゃないかなって思ったり」
悪くはないけど、今ひとつ決めに手欠ける。そんな中で転居先として急浮上したのが、彼が半年近く通っていた三崎だった。
「11月の後半でした。彼女に『そいういえば、三崎はどう？』って言うまでは移住するなんて考えてもいなかった。あまりに身近で見落としてたっていうか（笑）」
夕焼けがいっそう美しくなる
晩秋、彼女を初めて三崎へ連れてきた。彼の好きだった町を彼女もすぐに気に入った。でも、小旅行と移住の間には大きな壁があった。物件だ。
「どうせなら古民家みたいなところに住むのもいいかなって思ってたんですけど、水回りが希望と合わなくて」と彼女。
「空き家はたくさんありそうなのにいざ探してみると物件はあんまりないんだなという印象でした」と彼。
「三軒見せて貰って、ふたりでほぼ同時に『ここだね』って言ったのがこの家なんです」
築30年の商業ビルの一室。2DKで家賃6万5千円。三崎では珍しいエレベーター付きの物件だ。窓を開けると微かに波の音が聞こえる。潮焼けした屋根の連なり向こうに港が見える。水平線が煌めいている。必要なものだけが置かれたインテリアと相まってなんだかイタリアの古い港町みたいじゃないか。
「住みたい家と出会えたら移住って一瞬なんだなって思いました」



放っておいてくれない町

12月に転居したふたりは2021年1月1日に三浦市役所で入籍した。花暮岸壁で撮った移住と結婚の報告写真を彼がSNSで発信したことで翌日には町の行く先々で祝福された。

「喫茶店に行ったら『あ、昨日入籍したふたりだ！』って(笑)」「こんなに歓迎されるなんて思ってもいなかったよね」

東京は良い意味で人に無関心なのが心地良いと思っていた。でも、この町はまるで逆だった。

「うらりの2階にあるテラスとか『本と屯』で仕事することがあるんですけど、やっぱり東京の電源があるカフェで作業していたときは違うんですよ。放っておいてくれないというか。でも不思議と今はそれが心地良いんです」

「私も東京に住んでいたときは人に干渉されないカフェが好きだったはずなのに、今は町の人と声を掛け合うこの感じがあたらしくて楽しいんです」

新しい土地での散歩は発見がいっぱい

1. 三浦に移り住んできてから新しいインスタグラムのアカウントを作った瑞歩さん。散歩の途中で見つけたなげない風景や小さくてかわいいものを撮っては情報発信をしている。東京にいたときは気づけなかった「近所の素敵なもの」に意識が向くようになった
2. 港の目の前に住む小野寺夫妻は、三浦に来てからよく散歩をするようになったという。この日も自宅からすぐの商店街を歩いて三崎の氏神様「海南神社」へ。夕日が落ちるタイミングで外に出ることも多い。自分が住む半径数百メートルの狭い範囲でも、知らないお店や路地、普段見かけない猫が歩いていたりと、歩くたびに新しい発見があるそうだ



城ヶ島大橋を望むマンション

小野寺夫妻の仕事部屋の窓からは城ヶ島大橋と海が見える。仕事をしていると船の汽笛が聞こえたりもする。窓の向こうに空が広がる風景は東京に住んでいたときは味わえなかったこと。ふと窓を見たときに、すぐに一息つけるのも海の近くに住む大きな魅力。夕日が沈むころには仕事部屋もオレンジ色に変わり、自然とオフタイムに



らい近くなった感じですね」

三崎の暮らし

同じリモートワークでも、暮らしは大きく変わった。

「ずっと小旅行感があるというか。日常なのに非日常というか。東京にいた頃はめまぐるしくて立ち止まる暇もなかったせいか、夕日が沈んだりしているみたいなことにさほど興味関心を持っていなかったんですけど、ここは夕方になると町中の屋根が夕日で真っ赤に染まるんですね。あーもうこんな時間かー、散歩するかー、と海に行ったり。ちゃんと息抜きするようになりました」

「12時と16時に鳴るサイレンもいいんだよね」

「屋外で働いている人たちはこのサイレンで一斉に仕事の手を休める。そんな町の人たちとの一体感が心地良い。」

「仕事の忙しさは変わっていないんですけど、ここで彼といるとちゃんと暮らしているな、生きていって感じるんです」

散歩のついでに町の人と立ち

話をしたり、うらりや高梨農園の直売所などで食材を買って自炊することも増えた。

「三浦大根とかもそうですけど、ルッコラとか葉物にもびっくりしました。ひとつひとつが大きいし、味が濃いです」

「新鮮なのに安いんです」

旬の野菜や魚が季節を教えてくれることを知った。生活コストは東京にいた頃の3分の1になった。

「浮いた分が他のことに使えるので心の余裕が違いますね」

「本当に大切なものがここにはある。そんな暮らしを守りたいという意識が生まれた、と言う彼女は変化に胸躍らせる。」

「遅くまでだから仕事することがなくなりました。そんなにやらなくてもいいかなって」

「睡眠時間も増えたんじゃないですかね。静かだし町灯りもないのでぐっすり眠れるんです」

「三崎は夜が早いですよ。夕方の5時にはみんな飲み始めて。東京にいた頃は10時くらいから飲みに行ったりしてたけど、こっちではもう寝てますからね(笑)」



小野寺夫妻が見つけた
三浦のたからもの

美味しいもの
ステキなひと
ひみつの場所

住むことで見えてきた三浦の魅力を「食」「人」「場」の3つの切り口で語ります。

ミサキプレzzoの「モロッコ風春巻き」

自宅からほど近く、毎週末のように足を運ぶ三崎銀座通り商店街にあるカフェ「MP」。料理人の寺尾さんが作る料理はどれも絶品だが、とくに小野寺夫妻が好きなのはこの「春巻き」。薄いの旨味がぎゅっと詰まった一品で、パリパリの食感がたまらない。三浦に来て酒量が増えたというも頷ける



畑、海、空、三浦のすべてが詰まった風景

マイカーを購入してからバス通りではない道もよく通るようになった小野寺夫妻。とくにお気に入りの風景は、宮川方面を見渡せる畑に囲まれた道。広い空と海に向かって広がる畑、遠くには房総半島や伊豆大島も望める絶景スポット。港から三崎口駅方面に向かうとき、ちょっと遠回りしてこの風景を見に行く



服飾学生のイシイシユンスケさん

イシイさんのアトリエは父親の実家を改装した海が見える平家。引越してまもなく、三崎のお店でイシイさんと知り合った小野寺正人さんは彼にオリジナルキーケースの制作を依頼。若くしてしっかりと自分の世界観を持ったイシイさんのアトリエは、多くの若者が集う。レザークラフト以外にもコートやシャツなど、イシイさんの手がける服飾は多岐に渡る。週末、三崎の下町で食事していると高確率で出くわすらしい



週末には観光地で暮らしていることの良さも感じている。

「土日はMPとか、近所のお店で明るうちから彼とのんびり飲んでるんですけど、ここにいればいつもこの人がいるっていう安心感があるんです」「そうか！」

突然、彼が目を輝かせた。「人が最高なんですよ！」

それこそが三崎に友達を連れて来たくなる理由だと彼は言った。けれど人が最高の店や場所は東京にだってたくさんある。変わったのはたぶん、移住をきっかけに町に心を開いた彼自身なのだ。

「せっかくだから三崎で何かやりたいなって思っています。仕事だけだと勿体ないなって。副業かもしれないし、趣味の延長かもしれないんですけど」

この町の何がそう思わせるのだろう。

「三崎に来た人はみんな何かしらやってるんですよ。トライアルで飲食店を出したり、革職人をやっている二十歳の子がいたり、この地に足をつけて仕事している人たちがカッコいいなって思うんです」

手始めに、彼は海釣りを始めた。眺めているだけでは分からない様々な気づきがあった。

「移住も釣りと同じなのかもしれないですね。待つこととかタイミングとか。でも何より大事なのは少しでも興味があったらまず釣り糸を垂れてみることでですね。だかるといって焦ったり急いだりする必要はない。広い空の下、日溜まりで釣り糸を垂れるように、のんびりでいいのだと。」



三浦に来て広がった行動範囲

1. リモートワークが多くなった今も、週に数回は東京へ仕事に行く小野寺夫妻。始発駅から電車は確実に座れ、仕事や読書、趣味の時間に充てるにはちょうどいい時間

2. 東京に住んでいたときと比べ、家賃が大幅に下がったため車を手に入れ、行動範囲が格段に広がった。三浦半島内の場所にも気軽に往って週末の過ごし方も大きく変わってきたそう



観光地で暮らすということ
ここで始める、ここから始める



1987年生まれの達さんは、スポーツイベント・動画制作会社を営みながらユーチューバーとして活躍。1989年生まれの裕香さんは、レザー製品を制作販売



自然がある暮らしを求めて

東京は杉並区、西荻窪に住んでいた海老澤夫妻。2019年の12月に三浦に引っ越してから1年と少しが経った。達さんは映像制作を生業としながら2つの会社を経営し、ユーチューブやイチナナライブ(ライブ配信プラットフォーム)でコンテンツ配信を行っている。裕香さんはブライダル業界で働いたのち、結婚を機に退職。現在はレザー製品を制作し、ネットショップで販売している。

ふたりは2016年、達さんが経営するスポーツイベント事業の撮影で出会い、2年後には籍を入れた。ある日、居酒屋で飲みながら物件情報を見始めたことから、住みたい場所探しが始まったという。

お互いに自然やアウトドアが好き。将来はログハウスに住みたいねと話し、自然豊かな郊外で、広さのある家を探していた。候補に上がったのが千葉の木更津、埼玉の入間、神奈川の三浦。一番最初に内見に訪れたのが三浦だった。希望条件と合っていたため即

決したという今の家は、築15年で1LDK、10万円。木造庭付きで愛犬も走り回ることができる。家の裏には畑が広がっており、いずれは自分たちも農業を始めてみたいと語った。

とんとん拍子で引越しが進んだが、慣れ親しんだ東京を離れることに不安はなかったのだから。「長年ペーパードライブだったので、車の運転が不安でした。今ではもう慣れましたけど」「僕ら人付き合いが不安でしたが、いざ引越してみると温かい人はかりで。近所の人が野菜を持ってきてくれたり、畑を見学させてくれたり、親切にしてもらっています。最初は見慣れない若い夫婦が越してきたからか、散歩しているときよく見られましたけどね」

東京での暮らしは良くも悪くもドライ。同じマンションでもすれ違えば挨拶をする程度だったというが、三浦ではご近所さんとの交流が自然に生まれる。また、友人を家に招くこともなかったが、今は東京から頻繁に友人が遊びに来るといふ。これまでの人付き合いにも変化が起こった。

歩いて海に行けるログハウス

1.2.3. 日中は日差しが燦々とするログハウス。1LDKという間取りだが決して狭くなく、自由にアレンジができて好きな場所に寝室や仕事部屋を作ることができる。ベッドには小さなプロジェクターがあり、寝る前によくふたりで映画を観る 4. 自宅から歩いて10分ほどの雑木林を抜けると、そこには静かなビーチが。愛犬のお散歩コースとしてもよく利用する





仕事も住む場所も好きに選ぶ

ふたりの毎日のスケジュールを伺った。「僕は9時くらいに起きて、寝巻のまま2時間くらいパソコンに向かいます。11時からいよいよ昼食をとったら制作仕事をし、夕方は日課の犬の散歩。17時頃に夕飯を食べてまた仕事をし、21〜24時は毎晩ライブ配信です。試験的に一年続ける予定なので、出張の日も欠かしません」。腹に、仕事で埋め尽くされている。「私は少し早い8時くらいに起きて、家事を済ませます。昼食を食べたら1回目の犬の散歩に行つて仕事や家事を。夕方に彼と一緒に散歩したら夕飯を食べて、彼の

ライブ配信の時間までレーザー制作をします。夜は好きなことをしてだらだらしていますね」。毎日家にいながらも、お互いが好きなペースで過ごしている。

余暇の過ごし方も変わった。「引越す前はよくキャンプとか行ってたんですけど、今は庭で焼き鳥したり、海まで犬の散歩に行ったり。やっぱり家にいますね。日常にストレスがないって幸せだなと感じます」。リラックスを求めて選出しなくても、家を出ればすぐに自然がある。今後は子ども、飲食店の開業など、新しいことにもチャレンジしていきたいそうだ。

「三浦は限界集落でもないし、東京との距離も感じないです。医療も生活も今のところ不便がない。もし今地方移住を考えているなら、迷わず動いてみれば良いと思います」「田舎暮らしの面倒な人間関係とか、ネガティブな意見に惑わされたいではないですね。20代の若い人たちは一度住んでみたらいいんじゃないかな」

ふたりはとにかく素直。自分らしく楽しんで働くには？ 理想の生活を求めて動き続けている。「幸せになりたい」と思っているはずが、大人になるとブレーキをかけてしまうこともある。発信する、仕事や住む場所を変える。好きや興味のサインに、素直に従ってみるのもいいかもしれない。

自宅はふたりの制作現場

海老澤夫妻の自宅の半分はふたりの仕事スペースで埋まっている。個人事業主で家での作業が大半なふたりにとって、ワークスペースを充実させることはとても大切。裕香さんのレーザーラフトを制作するデスクには工具がいっぱい並んでいる。マンションやアパートと違って、制作のときに出る大きな音を気にしなくていいのが一軒家に住むメリットのひとつ。

達さんの動画配信スタジオは自宅2階の一室。背景に合成用の緑の幕が貼られ、モニターとマイクが並び、まわりを気にせず元気いっぱい声を出して配信ができる。お互い干渉し合わないプライベートなスペースを持つことで、仕事の効率は格段にあがったという



仕事をコツコツと積み上げる

収入の柱となるのは達さんの経営する2社でおこなう映像制作とスポーツイベント事業。東京時代からおこなっていた裕香さんのレーザー制作販売も、徐々に売上が上がってきている。また、達さんのライブワークとなったユーチューブは現在登録者数が2万5千人を超え、動画によって100万回近く再生されているものも。「ユーチューブは広告収入。イチナナライブでのライブ配信は、視聴者さんが投げ銭をくれる仕組みです。月によってブレはあるので、まだこれらだけで食べることはできませんが、一人くらいなら生活できる程の収入にはなってきました」

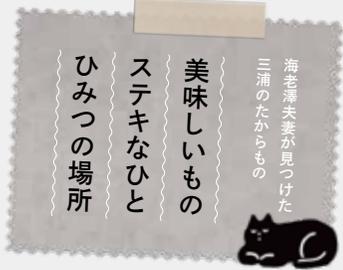
ふたりの仕事は、とくに都心に出る必要がない。一部の撮影仕事や出張を除けば家で完結するため、交通面での不便は感じないという。「今は交通網も整備されてきているので、ドアツードアとあまり時間がかからなかったり、一本で行けたりするじゃないですか。移動時間も作業にあてられ

ますし、引越して時間の使い方にメリハリが出ました。もちろん業種にもよると思うんですが、地方で暮らすのはすごくバランスがいいなと感じます」「都内に出たときも、三崎口方面に戻る電車はだいたい座れます。三浦は超便利なのでいいです。機材の荷物が重い撮影仕事や、普段の買い物は車で移動。一台の軽自動車を共用している。

移住後も難なく仕事ができるように見えるふたり。しかし、コロナ禍においては田舎暮らしの不便さを実感したという。「スポーツイベント事業が壊滅状態になり、仕事を選べる状況ではなくなってしまう。小さな仕事をたくさん受けていたら、東京との往復が増えただです。細かい交通費がかさんで、これは割に合わないな」とはいえ近場の三浦では仕事がないので、その点は困りましたね。横須賀という都市が近くにあれば、三浦は雇用や事業が少ない。家でできる仕事や複数の収入源を作っておけると、非常事態での不安も軽減される。

大竹農園のかきいちご

初声エリアにある大竹農園は、7種のいちごを栽培し春先にかけていちご狩りを楽しむことができる農家さん。シーズンになると手作りいちごジャムや、いちごのソフトクリームも販売する。かきいちごは冷凍したいちごをかき氷機で削つて練乳をかけた一品。サクサクで新鮮な甘いいちごがやみつきになるのだとか



海老澤夫妻が見つけた三浦のたからもの
美味しいもの
ステキなひと
ひみつの場所

自宅から見える富士山と夕日

ログハウスに住むことを夢見ていた海老澤夫妻が、三浦のログハウスに決めた理由のひとつとして、「家から富士山が見える」ということ。夕日が落ちるタイミングで富士山も一緒に見える景色が最高。四季折々で見せる表情豊かな自然、風景も三浦に住む魅力のひとつ



花暮美容室の菅沼政斗さん

裕香さんが通う三崎下町にある花暮美容室の美容師さん。移住して間もない頃、近所の美容室を検索したときにすぐに見つけて、今でも足繁く通っている。普段の生活のことや仕事の相談をしたりと、気軽に話せる間柄。移住してから定期的に合う人は、意外と美容師かもしれない



共に1984年生まれ。三浦市三浦町商店街の出身。お宿「bedbreakfast ichi」を経営。ネイチャーガイドの修さんによる自然体験ツアー。祐美さんが作る朝食が自慢



小さな宿で感じる、幸福な朝時間

1.2. 「ichi」は3部屋の個室からなる小さな宿。その日に滞在しているお客さんによって、宿の雰囲気はがらりと変わる。自然アクティビティを楽しみに来たファミリーや小さい子がいればにぎやか。ゆっくりと町歩きに来た夫婦がいれば、静かな時間が流れている。3.4. ゲスト同士の一期一会を感じながら、朝食を味わうのが醍醐味。和食か洋食、好きなほうを選べるのが嬉しい

正反対なふたりが出会った

「僕たち街コンで出会ったんです。毎年東京ドームで開催されている食の祭典。イベント終了後、同会場で街コンが開かれた年があり、そこで知り合ったという成相夫妻。「地元が一緒に共通の友達もいて、なぜか運命だと思ってしまっ」後悔してると言わんばかりに、冗談交じりに振り返る祐美さん。自分たちは性格も趣味も正反対だと話す。

「僕は小さい頃からよく三浦に遊びに来ていて、小網代の森の保全活動にも携わっていました。大人になって、生き物の調査の仕事をしていた頃にも三浦にはよく来ていて、いつか住みたいと思いつながら、横須賀で暮らして東京で働く生活をしていました」

一方祐美さんは「都内で事務職をしていて、毎日パソコンに向かっていました。横須賀や三浦に来るようになったのは彼と出会ってからです」と話す。生き物と釣りを愛する修さんをきっかけに三浦に来るようになり、自然とふたりにとっての住みたい場所

になった。

「以前仕事で、子どもの林間学校などで使われる宿泊施設の自然体験ガイドをしていたんです。そんな体験事業が三浦にあればいいなと思ったものの、泊まれる場所も少なかったもので、『自然体験ができる宿』の形を作ろうと思っただけです。修さんの構想を形にすべく動き出したふたりは、理想の場所を求めて三浦半島内を巡り、三崎にたどり着いた。

場所が決まれば次のステップも早い。過去に三浦市のトライアルステイを利用していた友人から大家さんを紹介してもらい、瞬く間に物件が決定。かつてはマグロ漁船員の下宿であり、一時は小説家らしいしんじの住居だった、築80年以上の歴史が刻まれた日本家屋を借りることができた。

「お互い脱サラしたばかりだったし、本当は1ヶ月くらいのんびり旅行しようかと話していたんです。でもスムーズに物件が決まったもんだから、仕方なく旅行を1週間で切り上げて、すぐに宿の準備に取り掛かりました」。約半年の時間をかけ、宿を作り上げた。

移住も開業も、気張らない

慌ただしくスタートを切り、準備の大変さに「こんな暮らしをするはずじゃなかった。なんで結婚したんだろう。って話したこともあるよね」と笑う祐美さん。当時、宿作りをしながら近所のドーナツ屋でアルバイトもしていた。「大変だったけど、壁紙屋さんとか近くでお店をやってる人とかいろいろな人が相談に乗ってくれたんです。祐美がドーナツ屋で働いていたから、地域のことも早い段階でよく知ることができました」と修さん。

しかし、宿をオープンしてしばらくは辛い日々が続いた。小さな観光地でお店をすること、1年を通してリズムを掴むこと、生活との良いバランスを作ること、時間がなかったのだ。

開業したからには認知されないといけない。近所の人も利用できる開かれた場所にした。そんな思いから当初は飲食店としても営業し、毎日ランチカレーを提供していた。「でも、三崎は平日は人が少ないし、休日でも夏と冬

で人の多さが違うんですよ。行楽シーズンで稼げると思っていて秋も意外と人が少なく、最初の年は『嘘だろ?』って話してましたね。当時の食事は毎晩余ったカレー。辛かったね」

ようやく肩の力が抜けてきたというふたり。モヤモヤが晴れなかつた最初の2年を気負いすぎた振り返る。「何もそんなに気張らなくてよかつたんです。土日だけしかお店を開けていなくても、冬は閉めていても、誰も何も言わない。そうやって生きてる人も多いし、三崎はマイペースが許される町なんです」

今、ichiは冬季営業をしていない。修さんは生き物の調査の仕事に出向き、祐美さんは東京に週3日通い、事務職の仕事を再開。「力んでいた最初の頃は生活も三崎一色で、閉塞感がありました。今は東京に働きに行く時間が息抜きになっていて、すごく良いリズムです」「生活も事業も、不真面目くらいが良いのかも。真面目にやりすぎると、楽しくなくなっちゃうしね」。5年目を迎え、ふたりはリラックスしていた。



釣り好きの亭主が作る、三浦堪能めし

1. バス停・三崎港から歩いて5分。商店街を抜けたあたりにはぼつんと灯るあかりが見えたら、ichiはもうすぐそこ。三浦観光やアクティビティで疲れた身体をあたたく出迎えてくれる 2.3. この日の夕飯は釣り好きの修さんが、事前に釣ってくれていたヒラスズキ。海鮮サラダ、海苔たっぷり揚げだし豆腐、地魚のユッケ、地魚の南蛮漬。炊きたてのごはんと頬張るのが正解



楽しみも心地よい暮らしも自分たちで作る

宿を始めて2年ほど、ふたりは修さんが暮らしていた横須賀の津久井浜から通っていた。そう遠くはないけれど、お客さんがいると片方が宿に寝泊まりしないといけない。仕事と暮らしのバランスを求めて、宿から程近い宮川町のアパートを借りた。築31年の2DKで4万4千円。駐車場付きでペット可という好条件だ。

「やっぱり三崎は安いですね。うちは港がある下町から少し離れている場所、駅までのアクセスも悪いから。でもゴミの分別が細かいかな。宿のゴミもあるから気をつけていないとすぐゴミが溜まってしまふ」「物価も安いのは助かりますね。おいしい野菜も安く買えるし。私たちは宿の買い出しがたら横須賀の『エイビイ』（大型格安スーパー）まで行っちゃうんですが、野菜は直売所の『すかなごっこ』で買ったり。あと、我々は結構『自活』をしています……」。

修さんは毎日のように海に出

向き、宿や家を出ず鮮魚を調達。祐美さんも一緒に釣りに行くことがあるそうだ。ichiでは、修さんが釣った魚を使った料理が食べられる。付近で釣れた魚が食べられるのは、旅の醍醐味だろう。

自活は魚だけに留まらない。「春先は葉っぱがいろいろ採れるんですよ。明日葉とかね」。散歩がてら食べられる植物を探すのが、暖かくなってきた頃の小さな楽しみなんだとか。成相夫妻は、海も畑もある三浦の暮らしを味わうのが上手い。

仕事もプライベートも「好き」を追求し、動き続ける修さん。暮らしの時間と自分のペースを大事にした祐美さん。夫婦関係もご近所付き合いも、心地良い距離感のように見える。「小さい町だから毎日のように顔を合わせる人もいるけれど、みんな変わらぬ人なんだよ」と声をかけ合うのがいいんですよ。「自分から関わりがいかなくても暮らしやすい町だけど、積極的に交流した方が断然楽しい町だね」。ふたりは今日も、三崎にたどり着いた人をのんびりと迎え入れている。



POEMのシナモントースト
三浦海岸駅前にある「喫茶 POEM」のシナモントーストは極厚で濃厚な味わい。切れ目を入れたパンの隙間にははちみつとシナモンがたっぷり。珈琲の苦味を味わいながら、少しずつ食べるのがポイント。喫茶歴30年以上の店主の辻さんが淹れる珈琲と、温かい人柄の辻さんのおしゃべりでついつい長居してしまう



壁紙職人の尼野克明さん

三崎在住で三浦市南下浦町菊名にアトリエを構える尼野さん。地元三浦の頼れるお兄さんの存在は、ichiの内装や修繕などを手がけてきた。海外ものの壁紙を数多く扱い、三浦をはじめさまざまなエリアの店舗、住宅の内装を手がける、人なつこい職人さん



よく釣りに行く諸磯岸壁

ichiの釣りアクティビティに参加していた親子とのお兄さん。いつも穏やかなこの場所は、天気がいいと富士山も見える癒スポットでもある。三方海に囲まれた三浦の土地は、釣り好きな成相さんにとって特別な場所。釣った魚を宿ですぐ調理して試食するのがichiのおもてなし





1982年東京都生まれ。東京造形大学でテキスタイルを学んだあと、「三宅デザイン事務所」に入社し、退社後は自身のブランド「ルイスノ」をつくる。

2週間で引越してしまっただ

現在テキスタイル作家として「ルイスノ」というブランドを展開している大類さん。3人の子育てをしながら2018年に東京都狛江市から三浦に引越してきた。有名ファッションブランドでテキスタイルを学んだあと作家に転身。長女が小学校にあがる前に転機が訪れた。

「昔から小説家のいしんじさんが好きで、彼の作品の中に三崎の話がよく出てくるんです。10年以上前から三浦三崎にはときどき遊びに来ていて、人間そのものが生きているって感じがする町が好きでした。長女が小学校にあがる直前、このまま東京にいいのかな、とふと思っただんです。そんなときに三浦で移住イベントがあって参加しました。あらためて町の雰囲気を感じたら引越さずにはいられませんでした」
イベントが終わって2週間のあいだに長女の入学手続きを済ませ、新しい家も見つけた。閑



心をこめて作ったものを丁寧に届ける

1.2. 子供を送り出してからほぼ毎日のように、自宅から歩いていけるアトリエで作業。広い机で生地を広げてイマジネーションを膨らませる。外から聞こえる川のせせらぎも相まって仕事もはかどるらしい 3.4. 大類さんがつくる作品でも人気の高いストール。さまざまな羊毛や生地を組み合わせた淡い色調が特徴的。大類さんらしい柔らかい印象の作品が多い



静な住宅街に佇む、3K平家で5万8千円。生活コストも大きく下がったという。

「子供3人と一緒にものすごいスピードで三浦に移住してきて、子供たちも大きく環境が変わって、ちゃんと生活に馴染んでくれるか心配していました。でも、子供たちは大人が思うよりずっと柔軟で、親が楽しんで生活している場所であれば子供たちも『大丈夫、安心できる場所だ』って思えるんだなって。近所の知り合いも増え、毎日元気に暮らせてます」

大類さんが住む家は小学校も近く、ちょっとした買い物をするのにも薬局やスーパーがあり不便に感じることは少ないという。車があれば家族みんなでお出かけだってできる。なにか生活していて不満なことはないですか、と訊くと「小児科の救急病院が近くにない」ということだった。

「三浦市立病院や町医者はいくつもあります。救急となると横須賀まで行かないといけません。都心に比べてお店の数は少ないですけど、でもその不便さも愛せるほど、この土地に住む人たち

は温かくて、自然もあって食べ物も美味しいですから」

住めば都という言葉通り、順調に三浦生活がはじまった。

三浦で複数の拠点を持つこと

東京に住んでいたときは居住スペースと仕事スペースが一緒になっていた大類さん。作品をつくる場所も、子供が居る場所も一緒に。三浦に来て居住スペースのほかに、家からほど近い場所に数万円でアトリエを持つこともできた。

都心ではなかなかコストがかかって難しい複数拠点も三浦に住むメリットのひとつと言える。「家で仕事をしているとどうしても集中できなかったり、仕事と生活が一緒になることは仕事の効率上デメリットもあります。東京に住んでいたときの家賃で2軒分借りられるのは本当に大きいです。子供たちが学校や保育園に行っている時に広いスペースで仕事ができることでオンとオフがしっかり切り替えられるようになりました」

どの地域でも同じことが言え

るが、駅から近かったり、お店が密集しているエリアは家賃相場が高くなる。逆にアクセスを捨てて、不便だけど居心地のよい安価な物件はフリーランスにとっても都合が良かった。

作家として、ひとりの母として。これから三浦に移住する人に向けて伝えたいことを聞いた。

「私は『いつか住みたい場所』だったところに移住しました。住んでみて、遊びに来た時とのギャップがないかがとても不安でしたが、当初抱いていた『いいな、住みたいな』と思う気持ちに間違いはなかったと思います。都内とは違って、独特の地域性があるところも楽しんでいければいいと思います。今までの生活をキープしようと思わず、その土地に寄り添って、身をまかせるような気持ちで生活してみたいです。この町にはどんな人でも迎え入れてくれる懐の深さと、やってみないと気が持たない後押ししてくれる、不思議な空気が漂っていますよ」
大類さんの軽やかで柔らかな印象は、自身が作っているストールそのものようだった。



1993年神奈川県三浦市生まれ、数代続く三浦の農家「やまさ園」の次女。現在は農業とフリーランスのデザイナー、そして将来のために雑貨屋さんで働いている。



祖母の存在が大きかった

三浦では秋にはみかん狩り、冬にはいちご狩りができるのをご存じだろうか。三浦大根をはじめとしたさまざまな野菜もつくる数代続く老舗農家「やまさ園」は三浦でも珍しいフルーツの里を営む。吉田さんはこの農家で生まれ育った。

「親が再婚するのをきっかけに三浦を離れ、9歳から27歳まで相模原にいました。眼鏡メーカーに就職して、相模原で2年間ひとり暮らし。なんとなく就職したものの、ずっと三浦のこと、実家の農業のこと、美味しいご飯を毎日作ってくれていた祖母のことが気になっていました。祖母からはすごく影響を受けていて、豚肉と三浦大根の角煮や菜果なますなど、あればキリがないほど大好きな料理があります。大根料理の研究者として本を出したり、採れた野菜を近所の方々にたくさん配ったりと、人としてすごく尊敬していて。祖母も高齢ですし、自分

になにかできることはないかと思つて、仕事を辞めて職業訓練校でウェブデザインの勉強をはじめました」

自分にはできないこと

通年野菜をつくり、収穫して出荷する三浦の農家は休む暇がない。やまさ園も人手不足になり2019年に吉田さんの母が相模原から三浦に引っ越し、吉田さんも2020年に三浦に戻り、やまさ園のウェブサイトを制作。朝は農業の手伝いをして昼からは久里浜の雑貨屋でバイトをする日々がスタートした。

「農場まで歩いてすぐの物件をネットで見つけて借りました。築20年の1LDKで5万5000円。海も駅も近いし日差しがたっぷり入る。車がないのでまとめて買い物ができないけど、駅近くにはスーパーもあって不便ではないです。海が近いので風が強い日はガラスに塩がついて掃除がちょっと大変だけど、でも自分の空

フリーランス兼農家という選択

大根料理研究者としての祖母の「三浦大根の魅力を残したい」という想いと今まで営み続けた直売所の存続、雑貨屋構想が合わさつて吉田さんの新しいお店作りが始まろうとしている。野菜の作り方から売り方までを学び、野菜と雑貨を販売する新しい形態のお店。ECサイトや野菜を販売するプラットフォームを使って、三浦野菜の魅力を伝えていくことに家族も期待を寄せている。

「今まで家族が継いでできた農業のあり方を大切にして、新しい商売につなげていくことが私なりの仕事かもしれません」

フリーランスの兼業農家。自分がやりたいことと家族が抱えている課題に取り組むことができるのもフリーランスという働き方の強み。移住先で自ら販売をつくり、それを見ただれかが「自分もできるかも」と思えること。その連鎖で町は活気づき、人が増えていく。可能性に満ちた三浦市では、今後吉田さんのような働き方をする人が増えていくだろう。

「自分の時間」をとことん楽しむ

1. 仕事に厳しくも、いつも優しいお母さん 2.3. いちご畑を元気いっぱい走り回る愛犬のふわちゃん 4. 海風が爽やかに入る大きな窓がお気に入り 5. 久里浜の雑貨屋で働く吉田さん。店主がこだわりぬいた生活雑貨に触れて、お店の運営や仕入れ、販売の勉強をする日々

